

幼少期に育んだ社会性が将来の社会課題認識に及ぼす影響

— よみたん自然学校の調査から —

小倉宏樹（よみたん自然学校／日本女子大学学術研究員）中里啓子（風の丘めぐみ保育園）
永島さくら（江戸川学園おおたかの森専門学校／日本女子大学学術研究員）請川滋大（日本女子大学）

1. 研究の背景と調査の概要

- 【研究目的】 幼児期から小学校段階まで、自然豊かな環境で主体的に学んだ子どもたちの幼少期の社会性の発達が、将来的な社会課題への関心につながるのかを明らかにする。
- 【研究の背景】 ・「自分で考え行動する主体的経験」「仲間との協働」「保育者の受容的関わり」の三要素が相互に作用し、前向きな自己認識とレジリエンス（回復力）を育んでいることが明らかとなった。（請川ら2026）
- ・高い自己肯定感と意欲が社会人・主権者としての意識の高さと関連することが示唆されている。（下村ら2025）
- ・社会課題への関心は、自己認識のみならず、他者との関わりといった社会性と関連していることが予想されるが、そのことは調査されていない。
- 【追跡調査の先行研究】 下村一彦他2025「大学生世代となった‘こどもの森幼稚園’（森のようちえん）卒園児の非認知的特質の傾向」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第15号、pp.1-14
- 請川滋大他2026「自然体験を通じた主体的な学びが子どもの自己認識に与える影響」『日本女子大学大学院紀要』第32号、pp.245-255

【調査の概要】

（１）質問紙調査

- 調査対象 よみたん自然学校の「幼児の学校」及び「小学部」に在籍したことがあり
2024年度に13歳～23歳になる207人のうち連絡先が分かる61人
- 調査期間 2024年3月～6月
- 回答数と属性 回答数34人（回収率55.7%）
- 性別 男性18人（52.9%）、女性15人(44.1%)、回答しない1人（2.9%）
- 年齢 13歳4人（11.8%）、14歳5人（14.7%）、15歳3人（8.8%）
17歳9人（26.4%）、18歳3人（8.8%）、19歳1人（2.9%）
20歳6人（17.6%）、21歳1人（2.9%）、22歳1人（2.9%）
23歳1人（2.9%）

（２）インタビュー調査

- 調査対象 質問紙調査において、追加での質疑にご協力を頂くことを了承した人のうち
2024年度時点で20歳以上から3名を抽出
- 調査期間 2026年3月～4月

【倫理的配慮】

本調査は、対象者に対して調査の目的および内容を説明し、同意を得た上で実施した。回答は統計的に処理し、個人が特定されることのないよう匿名性に配慮した。また、収集したデータは、本研究および今後発行予定の書籍への掲載以外には使用せず、研究目的以外での利用は一切行わない。

【調査対象の概要】

よみたん自然学校（2004年1月設立）

沖縄本島中部の読谷村にあり、その施設は、体験王国むら咲むらという観光テーマパークの中にある。
中庭のある赤瓦屋根の木造住宅を校舎とし、琉球石灰岩の石垣で囲われており、敷地内には4本のガジュマルの木が育っている。

- 3年保育「幼児の学校」（森のようちえん活動） 2007年4月事業開始 2026年6月現在15名
- フリースクール「小学部」（オルタナティブスクール活動） 2010年4月事業開始 2026年6月現在29名
- いずれも平日昼間に行われる日常型の活動

<特徴>

- 1日の活動を子どもたち自身で決定する。（朝の集まりでは、スタッフがそれぞれの子どもに、今日やりたい事を聞き、ホワイトボードにそれぞれのやりたい事と名前を書き出していく。やりたい事によってグループ分けされ、スタッフがつく。）
- 基本的に、スタッフは子どもたちのやりたい事を実現するためのサポート役として関わる。

<1日の流れ>

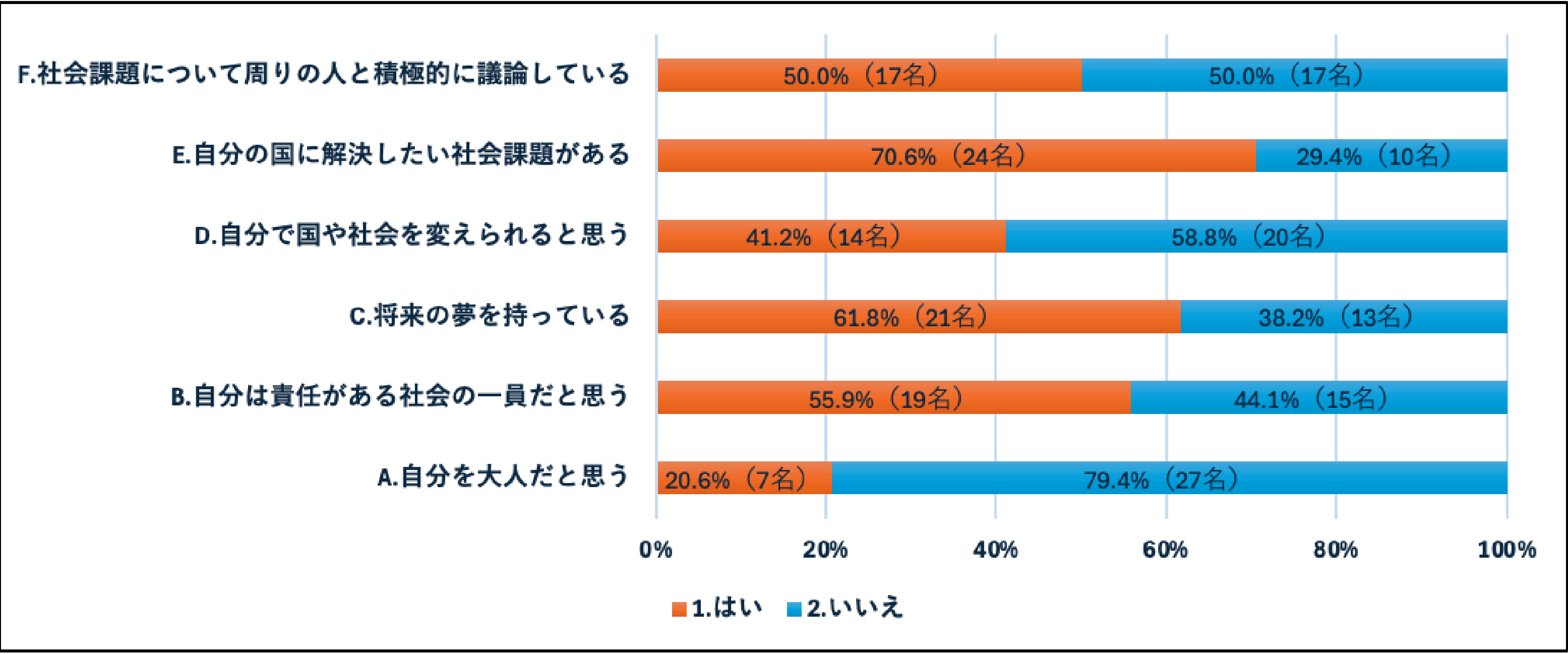
- 9:00 朝の集まり
9:30 午前の活動
12:00 昼食
12:30 午後の活動
14:00 片付け
14:15 帰りの集まり
14:30 下校



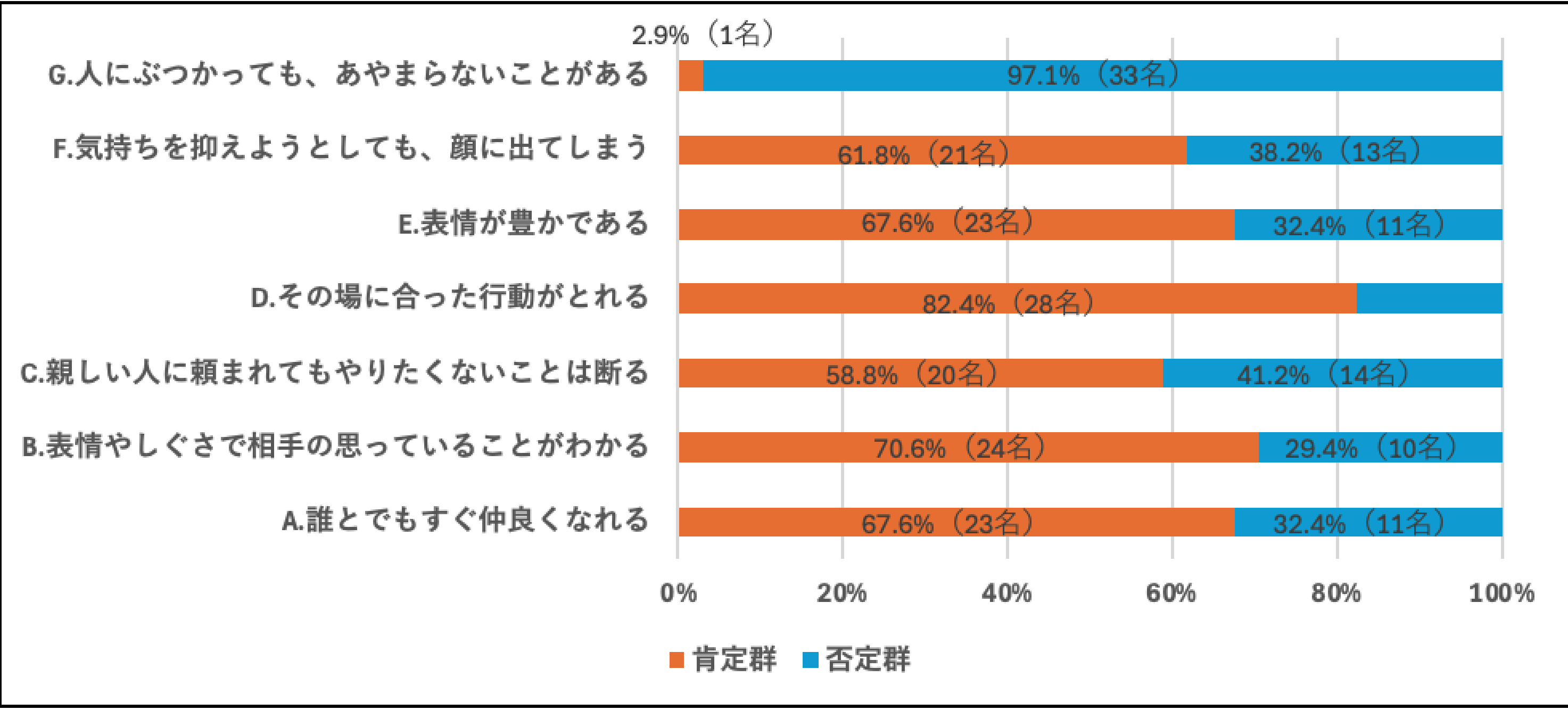
2.結果と考察

2-1.質問紙調査

【社会課題】に関する項目 n=34



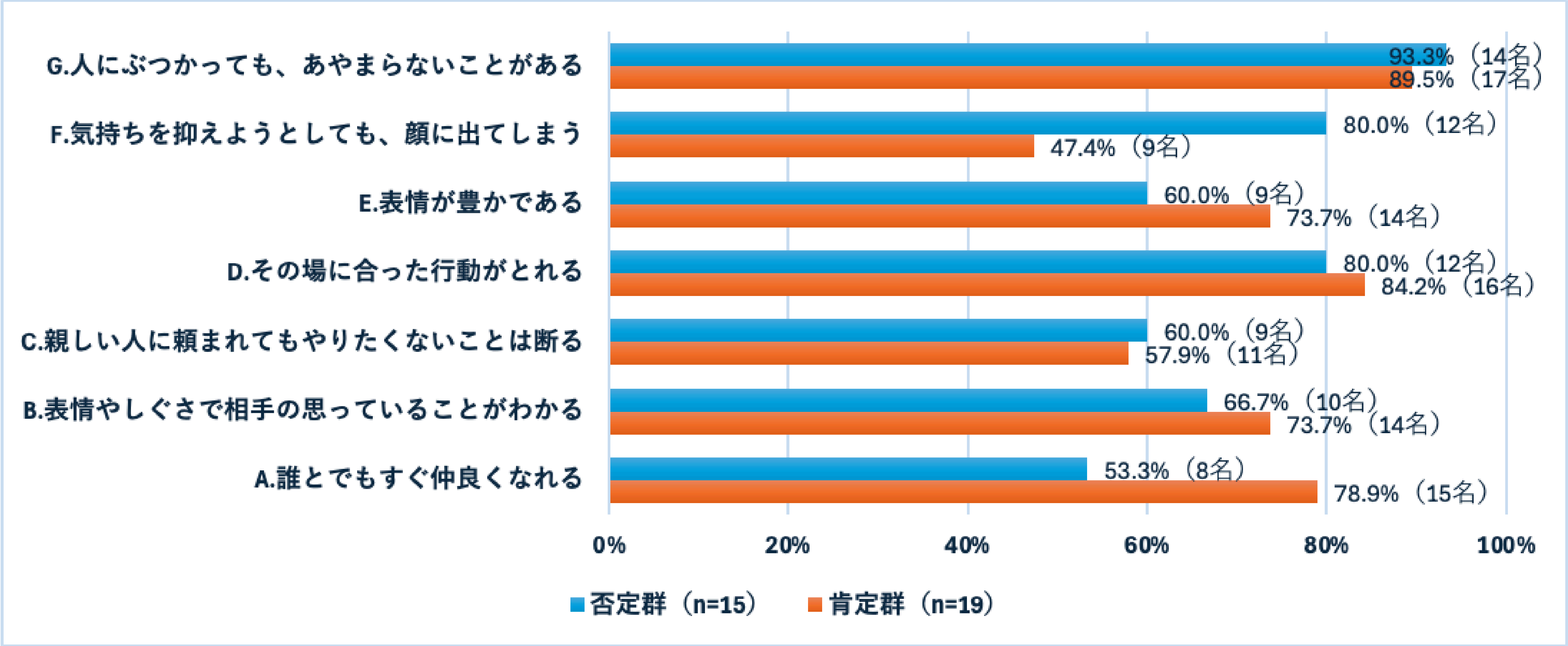
【社会性発達】に関する項目 n=34



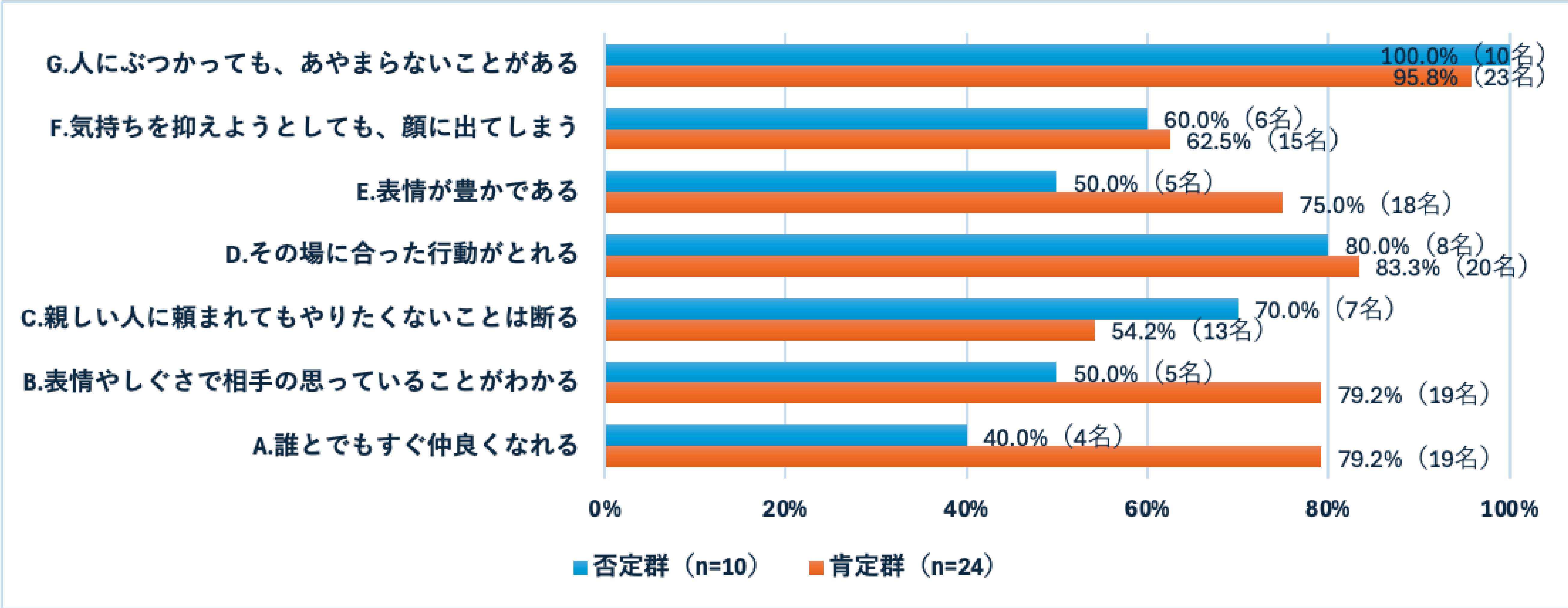
【社会課題】に関する項目では、「自分の国に解決したい社会課題がある」(70.6%)や「将来の夢を持っている」(61.8%)、「自分は責任がある社会の一員だと思う」(55.9%)などの項目においては半数以上が肯定しており、対象者は社会への関心や将来への展望を比較的強く持っていることがうかがえる。一方で、「自分を大人だと思う」(20.6%)や「自分で国や社会を変えられると思う」(41.2%)は低い割合にとどまり、社会への関心はあるものの、自らが社会に影響を与えられるという実感は十分に形成途中であるようだ。

【社会性発達】に関する項目は全体として中程度の肯定的傾向を示し、「その場に合った行動がとれる」(肯定群82.4%)、「人にぶつかってもあやまらないことがある」(否定群97.1%)など対人関係や規範的行動に関する項目において顕著であった。一方で、自己主張や感情統制に関する項目はばらつきがあり、個人差があることが示唆された。これらの結果は、基本的な社会的スキルはある程度獲得されているものの、内面的な調整能力や自己決定に関わる側面は発達途上にある可能性を示している。

「自分は責任がある社会の一員だと思う」と社会性発達との関連



「自分の国に解決したい社会課題がある」と社会性発達との関連



【社会課題】への意識が高い群では、対人関係や他者理解に関する社会性が高い傾向が見られた。一方、自己主張には逆の傾向が見られ、規範的行動には大きな差は確認されなかった。

社会的責任意識と【社会性発達】との関連が確認された。このことから、自らを社会の一員として認識することが、他者との関係形成や状況に応じた行動選択を促進する要因となる可能性が考えられる。社会問題への関心の高さが他者への関心や共感性と関連している可能性が示された。社会課題への意識が、単なる知識的関心にとどまらず、他者志向的な態度や行動と結びついていることを示唆すると考えられる。

2-2.インタビュー調査

Aさん（酪農従事者・20代前半・女性）

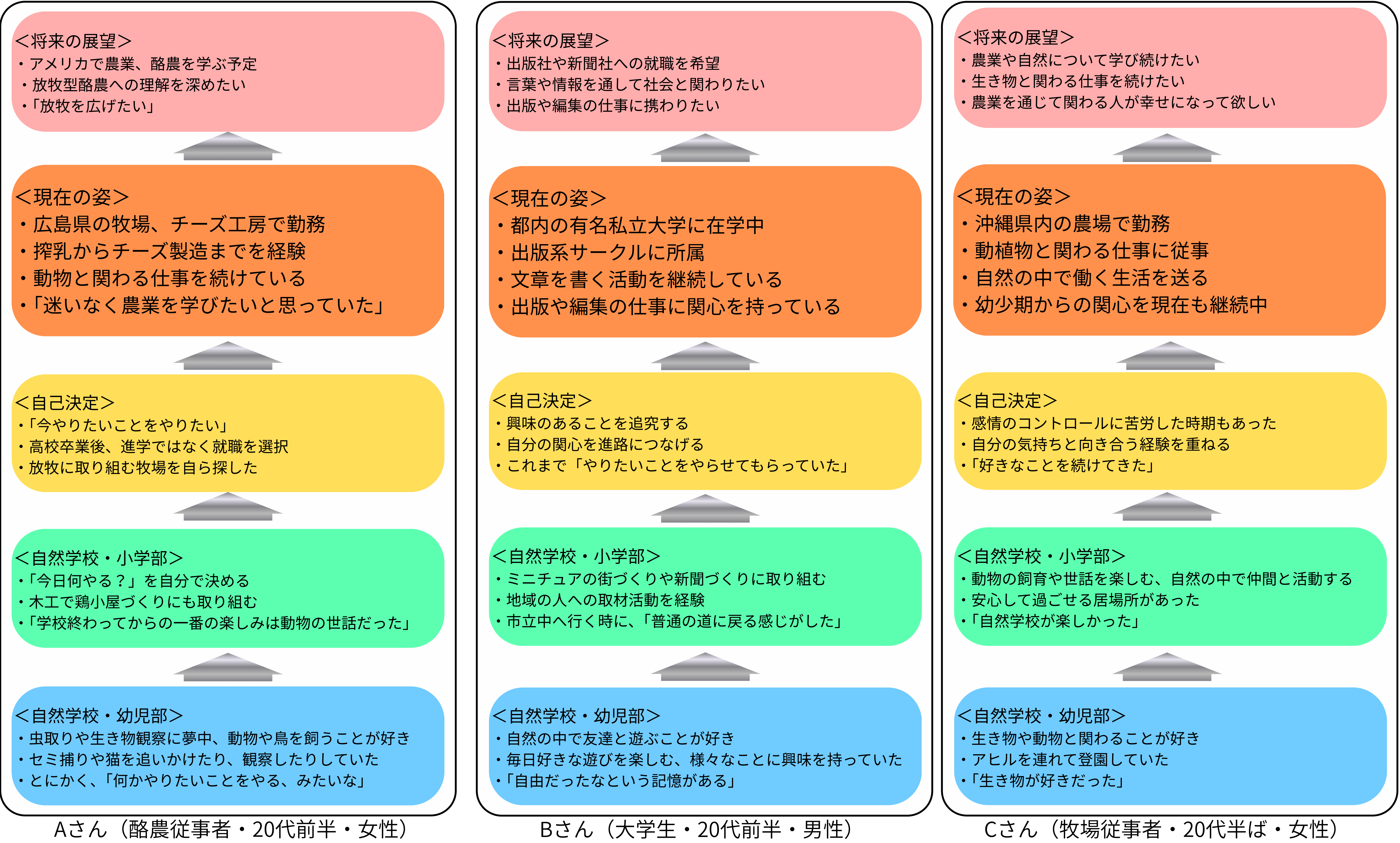
Aさんは3歳から小学4年生までよみたん自然学校で過ごした。幼少期から生き物への関心が強く、自然学校の猫を追いかけたりセミ捕りをしたりして遊んでいたという。また、毎朝「今日何をするか」を自分で決める経験を通して、「何かやりたいことをやる子どもだった」と振り返る。小学5年生で公立小学校へ移った際には戸惑いもあったが、その後も動物への関心を持ち続けた。家ではアヒルやガチョウを飼育し、その世話を日常的に行っていたという。「鳥が好きだったので平飼いがいいと思った」と語っており、生き物との関わりを通して動物福祉への関心も育まれていった。高校卒業後は自ら放牧を行う牧場を探して就職した。現在は酪農に携わりながら、近い将来には、アメリカで農業を学びたいと考えている。

Bさん（大学生・20代前半・男性）

Bさんは小学部時代、ミニチュアの街づくりや新聞づくり、コマ撮り映像制作などに夢中になった。特に新聞づくりでは、子ども同士で記事を書いたり地域の人への取材を行ったりしており、その活動がきっかけとなって実際の取材現場を見学する機会も得た。また、制作したコマ撮り映像作品がコンテストの最終選考に残るなど、自分たちの表現活動が社会へつながる経験もしている。当時の経験について、「やりたいことをやらせてもらっていた」と振り返っており、自ら関心を持ったことを追究できる環境が印象に残っているという。現在は大学で学びながら出版系サークルに所属し、文章を書く活動をしている。将来は出版社や新聞社など、人や社会を言葉でつなぐ仕事に携わりたいと考えている。

Cさん（牧場従事者・20代半ば・女性）

Cさんは幼い頃から生き物や動物が好きで、アヒルを連れて登園するほど動物との関わりを楽しんでいた。小学部では動物の飼育や自然の中での活動に親しみ、仲間とともに安心して過ごせる居場所として自然学校を経験している。一方で、子ども時代には感情のコントロールに苦労することもあったが、多くの大人や仲間を支えられながら自分の気持ちと向き合う経験を重ねてきたという。高校卒業後は農業や畜産について学び、農場や動物病院での勤務、農業研修など様々な経験を積んできた。現在は沖縄県内の農場で動植物と関わる仕事に従事しており、幼少期から続く生き物への関心を現在の生き方につなげている。将来も農業や自然について学び続け、人や生き物がともに豊かに生きる社会に貢献したいと考えている。



よみたん自然学校における経験は、単なる自然体験にとどまらず、「自分の関心を起点に活動を選択し、それを他者や社会との関係の中で深めていく経験」として卒園児の中に残っていることが示唆された。特に、「今日何をやるか」を自分で決定する日常的実践は、卒園後の主体的な進路形成や社会との関わり方にも影響している可能性が考えられる。

3.まとめ

自然環境の中で子ども自身が活動を選択し、他者と関わりながら生活を構成していく経験が、卒園後の主体的な生き方だけでなく社会との関わり方にも影響を及ぼしているとともに、社会参加意識の形成や社会課題への意識に関わっている可能性が示唆された。また、社会にある課題への意識が先にあるのではなく、自分が関心あることを突き詰めていくうちに、社会の課題を意識するようになっていっていることがうかがえた。

今後どのように社会課題に取り組むかは引き続きの調査が必要である。また、サンプル数が少なく、年齢層が低いこともあり、今後は調査対象者を拡大していくとともに、長期的な縦断調査を続けていくことも必要である。引き続き調査を継続し検討をしていきたい。